今後の音楽イベントの可能性
－コロナ禍のイベント規制を経て－

渡辺　成美

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は人々の生活自体に大きな影響を与えた。新型コロナウイルス感染症の影響により、音楽イベントやフェスは中止や延期を余儀なくされた。また、音楽イベントを開催することができても、密集になってしまうことで集団感染やなど感染対策の面で問題となることが多く、音楽の在り方を考えさせた。そこで、本論文では、コロナ禍において音楽業界の人々がどのような活動を続け、観客側の思いを実際に聞き把握することで、今後の音楽イベントの在り方と可能性を明らかにした。

新型コロナウイルス感染症感染拡大が見られた 2020 年では音楽イベントや大型ロック・フェスなどは開催中止や延期になることが多かったが、オンライン配信などのツールを用いて無観客ライブでの開催がされるようになった。また、SNS を用いた活動やサブスクリプションに力を入れるなど音楽の見せ方にも変容が見られた年である。オンライン配信では今までは会場に遠くて行けなかったイベントも行った気分を味わえ、音楽の楽しみ方の幅が広がったなどの声が本論文の調査の回答にも挙げられた。一方で、多くのライブハウスでは営業自粛を強いられリアルライブが行えないことでライブハウスの経営状況は悪化し、閉店せざるを得ないライブハウスも存在した。オンライン配信はコロナ禍によってかなり浸透していたが、ネームバリューのないアーティストにとって収益化という面では厳しい状況でもあった。音楽ベニュー側の取り組みとして、クラウドファンディングを用いた資金調達なども見られ、急速なデジタル化によって音楽イベントは多様化していくことが考えられる。

音楽を活用した地域の取り組みでは、下北沢音楽祭に注目し取り上げた。下北沢音楽祭では新型コロナウイルス感染症の影響を受けながらもイベントを中止にするのではなく、オンライン配信に切り替え、地域の雰囲気や温度感を感じてもらえるような配信を行った。コロナ禍においてイベント開催は人が多く集まるためリスクも大きいが、コロナ禍によって人が集うことがなくなり閑散としてしまったからこそ、音が街から溢れ出すことによって街も人々も活気づけられ、地域活性化の入り口にもなると考えられる。

音楽イベントが発展し続けるためには、コロナ禍で培った技術を存続しながら、コロナ禍でライブ離れしてしまった人や新たな動員を引き寄せることが必要である。SNS やサブスクリプションなどのツールを用いた活動も存続していくためには大切なことであるが、リアルライブでしか味わえない生の音、観客が実際に発する声はアーティストにとってもモチベーション維持にも繋がる。コロナ禍で失われた時間を経て、音楽を通じて人と人の繋がりや音楽イベントの可能性を広げることが期待される。